

比喩法

(小学二年～六年)

比喩法は、書き手が表したいと思っている事柄を表すためのことばが普段使用していることばの中にない場合に用いられる用法です。

比喩法には、いくつもの種類がありますが、ここでは、代表的な用法として、「直喩法」「ちよくゆ擬人法」「せいゆ声喩(オノマトペ)」について取り上げてみましょう。

(1) 直喩 (小学二年・三年)

直喩とは、たとえとして用いられるものとたとえられるものがひと目で分かるような特定の形式(「ちようど…のよう」「まるで…みたい」など)で表されている比喩法です。

具体的な事例で見えていきましょう。  
次にあげる事例は、「スイミー」の中に用いられている用法です。

(ア) ある日、おそろしいまぐろが、おなかをすかせて、すごいやさで ミサイル みたいにつつこんできた。

(イ) にじ色の ゼリー のようなくらげ。

(ウ) 水中ブルドーザー みたいな いせえび。

(エ) ドロップ みたいな いわから生えている、こんぶやわかめの林。

(オ) やしの木 みたいな いそぎんちゃく。

右の事例のうち、ミサイル で囲まれた語句が「たとえられているもの」で、ゼリー ドロップ やしの木 などの語句が「たとえとして用いられているもの」です。そして、——線を付けた語句が直喩であることを示している形式です。この形式から、(ア)から(オ)までの事例がひと目で直喩であると分かります。

これらの直喩の技法は、語り手がスイミーの目と心を通じた形で周囲の様子を述べています。ですから、「たとえとして用いられているもの」にスイミーが見ているもの、すなわち「たとえられているもの」に対するスイミーの見方や感じ方がよくあらわれています。

(ア)では、「まぐろ」のことを「おそろしい」と感じていますから「ミサイル」にたとえています。けれども、(イ)から(オ)では、スイミーが海の底で見た「すばらしいもの」「おもしろいもの」としてとらえられているので、「たとえ」も「ゼリー」「水中ブルドーザー」「ドロップ」「やしの木」といったものがもちいられています。

このような直喩の表現からは、「ミサイル」や「ゼリー」「水中ブルドーザー」「ドロップ」などがどんな感じを与えるものであるかを考えることによって、スイミーがこの時におかれていた心の状態などを具体的に想像することができはります。

また、「まぐろ」や「くらげ」「いせえび」、海の底にある「いわ」や「いそぎんちやく」などについても、それらの実際の姿や様子を生き生きと思い描くことができます。このことから、比喩の表現には物事を生き生きと描き出す働きがあることを理解することができます。

【課題】 「スイミー」を読んで、「直喩」の表現を手がかりに〈スイミー〉という魚の特ちょうについてまとめましょう。

## (2) 隠喩 (小学五年・六年)

隠喩は、直喩の場合のように、それと分かるような特定の形式を備えてはいません。けれども、ことばとことばとの間の結びつきに普段考えられているような意味やつながりから外れていると感じさせるような比喩法です。

「時が流れる」とか「心の重荷」などがその事例です。

「時が流れる」という隠喩は、これまでも言い古されてきた言い方ですが、「時」というものは本来は「流れる」ものではないので、表面的にはこの二つのことばの間におけるつながりはありません。けれども、この言い方は「時」を〈流れる川〉に見立てて、その過ぎていく状態を「流れる」と言い表しているので比喩の表現と見なせるのです。

次の事例は、「雪わたり」という作品の中で用いられている用法です。

(ア) 赤いふうろう細工のほおの木の芽が、風にふかれてピツカリピツカリと光り、  
林の中の雪には(イ) あい色の木のかげが一面あみになって落ちて、日光の当たるところには銀のゆりがさいたように見えました。

ここには、二つの隠喩が使用されています。

(ア)は、「赤いふうろう細工」のような形をした「ほおの木の芽」という意味です。(イ)は、「かげが落ちる」というすでに言い古されてきた言い方ですが、やはり、「かげ」と「落ちる」の間には、物理的に見て不自然な関係がありますから、二つのことばの間におけるつながりはありません。

これらの表現が、ことばの結びつき方からみれば、明らかに不自然でつながりがないのに、この場面においてはそれほど不自然に感じられないのはどうしてなのでしょうか。

それは、ここに描き出されている情景が普通の言い表し方では表すことのできないようなものだからではないでしょうか。

この場面は、四郎とかん子、それに子ぎつね紺三郎こんさんぶろうの三人の目に映った情景です。林の中の様子がこのように不思議な情景に見えたのは、三人の明るくはずんだ心のせいでもあるのです。ですから、この隠喩の表現にはそうした心が反映されているということが分かります。

隠喩の表現には、登場人物の心の中を映し出す効果や、この表現にかかわる人物のものの見方が表れているので注意していく必要があります。

【課題】 「雪わたり」を読んで、「隠喩」の表現を手がかりに登場人物が心の中で思っていることを想像してみましょう。

### (3) 擬人法 (小学六年)

擬人法は、無生物や人間以外のものを人間になぞらえて表現しようとする表現技法です。直喩や隠喩の表現と比べてみると、この擬人法は、隠喩の中に含めてもおかしくない表現技法であるともいえます。

けれども、教科書に取り上げられる教材の中で多く見受けられるものが、この擬人法であり、こちらの方が隠喩の表現よりも理解しやすい表現技法であるということが出来ます。

「川とノリオ」という教材では、しばしばこの擬人法の表現上の効果が問題となります。事例に沿って見ていくことにします。

- (ア) 町外れを行く、いなかびたひと筋の流れだけど、その川はずすしい音をたてて、さらさらと休まずに流れている。
- (イ) 春にも夏にも、冬の日にも、ノリオはこの川の声を聞いた。
- (ウ) (おいで、おいで。つかまえてごらん。わたしは、だあれにもつかまらないよ。)
- 川の水がノリオを呼んでいる。白じらと波だつて笑いながら。
- (エ) 川はいつのまにか笑いをやめて、ひたひたとノリオをとり巻いた。

この教材では、他にもいくつかの無生物が擬人化されて表現されていますが、最も多く擬人化されているのが「川」です。

(ア)は、この教材の冒頭の一節です。冒頭から、ほとんど擬人法とは分らないような形ですが、「すずしい音をたてて、さらさらと休まずに流れている」という表現に、書き手の擬人化への意識が働いています。

題名通りに、この教材において〈川〉の果たしている役割の大切さが象徴されている箇所です。この直後に、(イ)の一文が来ています。〈ノリオ〉は、いつでもこの「川の声」を聞いていたというのです。

(ウ)は、〈川〉が〈ノリオ〉に呼びかける形で、全体が擬人法となっています。この「また早春」という場面では、これと同じような表現が三箇所出現して、〈ノリオ〉の生活が〈川〉とは切り離せない関係にあったことを表しています。

いくども季節を重ねるうちに、〈ノリオ〉の生活にはさまざまな不幸がおしよせてきますが、〈川〉はどんな時でも〈ノリオ〉と共にあって、「さらさらと歌い、さらさらとすずしいせの音をたてて」、「いつときも休まず流れ続け」ているのです。

このような〈川〉の様子をその擬人化の表現から読み取り、〈ノリオ〉のおかれている状況と比較することで、この「川とノリオ」という物語の中心的内容に迫っていくことが出来ます。

このように、擬人法という表現技法は、〈川〉のような無生物をも〈人格化〉して描き出す方法ですから、そこには、他の人格を持つている登場人物との密接な関係が存在します。こうした点に注意して読んでいくことが必要になります。

【課題】 「川とノリオ」を読んで、「擬人法」を手がかりに〈ノリオ〉にとって〈川〉はどのような役割をはたしているのが考えてみましょう。

(4) 声<sup>せい</sup>喩<sup>いゆ</sup> (オノマトペー) (小学四年)

声喩は比喩の一種と考えられていますが、他の比喩とは根本的に異なるところがあります。多くの比喩の表現は、一般的には表現しようとするものを〈形〉を通して具体化しようとしません。

これに対して、声喩の場合は、ものごとの中の音や声はもちろんですが、状態や様子の感じまでも〈音声化〉した表現で具体化しようします。

たとえば、「木の葉がさらさらと落ちてきた」という場合には、「さらさら」という〈音〉を〈音声化〉して表しています。

「雪がちらちらと降っている」という場合には、「ちらちら」は〈形〉を〈音声化〉して表したものです。

「あわはつぶつぶ流れました」という場合には、「つぶつぶ」も、〈音〉のない状態をこのように〈音声化〉して表しているのです。

また、「ぐったりと横たわっていた」の「ぐったり」とか、「ぼんやりとたたずんでいた」の「ぼんやり」などは、明らかに〈音〉のない状態や様子などの〈形〉を〈音声化〉して表そうとしたものです。

これらの使用例のうち、一般的には、「さらさら」のように、〈音〉を〈音声化〉して表したものを「擬声語」と呼んでいます。

また、「ぐったり」とか「ぼんやり」のように、ものごとの状態や様子を〈音声化〉して表したものを「擬態語」と呼んでいます。

けれども、中には「ちらちら」とか「つぶつぶ」のように、「擬声語」と「擬態語」の中間に位置しているようなものもあって、両者を厳密に区別することが難しい場合が意外と多いものです。

そこで、〈音〉を出すものであっても、〈音〉を出さないものであっても、最終的には、どちらも〈音声化〉して表そうとする点では同じなので、これらの表現をまとめて「声喩」と呼んでいた方が正しいということになります。「声喩」ということばが難しく思われるので、「オノマトペー」と呼んでもよいのです。

「かさこ地ぞう」の中の具体例で見ておきましょう。

- (ア) そこで、じいさまと ばあさまは、土間に 下り、ざんざら すげを そろえました。
- (イ) じいさまは、とんぼり とんぼり 町を 出て、村の 外れの 野の原まで 来ました。
- (ウ) すると、ばあさまも ホホと わらって、  
あわの もちこ  
ひとうす ばったら  
と、あいどりの まねを しました。
- (エ) そして、じいさまの うちの 前で 止まると、何やら おもい ものを、スツサン  
スツサンと 下ろして いきました。

(ア)から(エ)までの——線を附した事例が声喩(オノマトペ)です。いずれも普通に用いられている声喩と比べると見慣れないものが多いことがわかるでしょう。

それだけ、「音声化」に工夫をこらしていることがひと目で理解されるでしょう。

(ア)の「さんざら」は、すげをそろえる音と様子を共に「音声化」して表していることばです。これと同じ種類のものは、(ウ)の「ばったら」です。

(ウ)の「ホホ」と、(エ)の「ズッサン ズッサン」は、カタカナ書きで示されているように、「音」を「音声化」して表している事例です。

(イ)の「とんぼり とんぼり」は、じいさまの力ない歩きぶりを、つまり、「様子」を「音声化」して表している事例です。

いずれの場合も、特別な「音声化」の表現によって読み手の聴覚や想像力に訴えて、その場面の状態や様子を具体的に生き生きと描き出していることが分かります。

声喩にも明らかに物事を具体的に描き出す働きが備わっていることが分かります。

【課題】 「かさこ地ぞう」を読んで、用いられている「声喩」がどのような働きをしているかを考えてみましょう。

## 対比法

(小学六年)

対比法とは、人物やものごとの異なる性質や特徴を並べて示すことで、そのどちらか一方を強調する効果をもたらす表現技法のことです。

対比法には、文章全体の中の場面と場面との対比や段落相互の対比、人物像の対比などもあります。けれども、これらについては、文章構成や筋(プロット)における対比として考えていくことにしましょう。

ここでは、文と文、語句と語句というレベルでの対比についてだけに限ります。

「たんぼぼの ちえ」という説明文における対比の事例を見てみましょう。

(ア) よく晴れた 日には、わた毛の らっかさんは、いっばいに ひらいて とんで いきま

(イ) はんたいに、しめりけの 多い 日や、雨ふりの 日には、わた毛の らっかさんは、すぼんで しまします。

(ア)と(イ)の文は続いていて、両者は対比的に記述されています。たんぼぼのわた毛のらっかさんにかかる二つの異なった現象をあげています。

この部分には、それまで述べてきた「たんぼぼのちえ」の典型を示す事実が述べられています。

この対比によって、たんぼぼには、そのわた毛のらっかさんの働きを最大限に發揮できるようなすばらしい知恵が備わっているということが強調されているのです。

この部分は、「たんぼぼのちえ」という題名の意図するところと密接につながっており、この文章全体でもかなり重要な役割を果たしていることが分かります。

文学教材の場合で見ても、  
「どろんこ祭り」という教材に次のような部分があります。

せつちゃんは、ナマズでも食用ガエルでも、平気でつかんでびくに入れるが、三郎はナマズの大きな口を見ると、体がすくんで、びくを落つことしそうになる。

この物語では、冒頭に〈せつちゃん〉という女の子と〈三郎〉という男の子の性格が紹介されています。〈せつちゃん〉はおてんばで男の子みたいなのですが、〈三郎〉の方はその逆なのです。

右の部分は、川へ魚取りに行った時の二人の仕草を対比的に叙述しています。この二人の人物の正反対の性格が描き出されています。

この物語では、冒頭における二人の人物の性格に象徴されるように、この二人の人物の行為や仕草が詳しく描き出されています。

要するに、女の子が男の子みたいで、男の子が女の子みたいな人物設定となっているのです。

ところが、どろんこ祭りの時の〈せつちゃん〉のいたずらもとで、二人は、皮肉にも本来の男の子、女の子に立ち戻ったような具合になります。

その最期の場面では、二人の行為が次のように描き出されています。

しかし、今日はいつもの三郎ではなくって、ほっそりとした首をしゃんとのぼし、やんちゃな男の子みたいに、力をこめてせつちゃんの手を引つ張つて起こしてやった。

せつちゃんのほうは、自分のいたずらからこんなことになって、これまたいつものせつちゃんらしくなく、おろおろしていた。

右の場面で用いられている「対比法」では、対比されている二人の人物のどちらか一方のある一面が強調されているというより、双方がそれぞれに一方の性格に対照されて強調されるというお互いの働きかけが見られます。

こうした物語の場合には、全体を通して二人の人物の性格の対比が行われていきますから、それぞれ対比的に表している語句などにも十分注意しながら読んでいくことが必要となります。

ただ、この物語の場合には、この二人の人物像を読み取っていくところに目的をおくよりも、最後の思いがけない逆転のおもしろさを楽しむでいくことに中心があると考えた方がよいでしょう。

【課題】 「たんぼのちえ」を読んで、「対比法」を手がかりにたんぼに隠されているすばらしい知恵を読み取っていきましょう。

【課題】 「どろんこ祭り」を読んで、「対比法」による人物の描き方のおもしろさを味わっていきましょう。



(小学一年・小学四年)

反復法とは、同じ事柄や内容を繰り返し示すことで一定の意味・内容を強調する表現技法です。

反復の仕方には、全く同じことばで同じ事柄や内容を繰り返す場合と、ことばを変えて同じ事柄や内容を繰り返す場合があります。

どちらの場合でも、同じ事柄や内容を繰り返し述べるといことは、そこに繰り返し述べなければならぬ理由があると考えていくべきです。

多くの場合には、繰り返しされる事柄や内容そのものに大切な意味が含まれています。その大切な意味とは、述べられている事柄や内容がもともと備えている本質であったり、価値であったりすることが多いようです。

「どうぶつの赤ちゃん」という教材で具体的に見ていくことにしましょう。

この教材では、「ライオン」「しまうま」「カンガル」の三種類の動物の赤ちゃんの生まれたばかりの様子と、成長の過程が簡潔に説明されています。

この教材の中で用いられている「反復法」では、さまざまな事柄や内容が反復されています。

この教材では、動物の赤ちゃんの様子や成長過程を説明する手順と方法に沿って見ていくと、反復という表現技法がよく理解できます。

その手順と方法を見てみますと、三種類の動物に共通して取り上げられている事柄が同じことばで出てきています。

①「赤ちゃん」の「大きさ」、②「目」や「耳」の状態、③生まれたばかりの時の歩き方、④お母さんのおちちを飲む時期、などです。

なお、これらの事柄や内容の中には、直接出てきていませんが、やはり、三種類の赤ちゃんの様子と成長の過程に共通して繰り返し述べられている内容、繰り返し用いられている同じことばがあります。

それは、〈自分自身の力で立ち上がったたり、獲物をつかまえたり、草を食べたりするようになる〉様子が繰り返し説明されていること、また、「じぶんでは」「じぶんで」といったことばが繰り返し返されていることです。

これらの繰り返し返されている同じことばや同じ事柄に目を向けて読んでいくことで、それぞれの動物の赤ちゃんの共通点や相違点がはっきりと理解できるはずです。

そして、とりわけ重要なのは共通する点です。共通する点から、こうした野生の動物の赤ちゃんの本質をはっきりと読み取ることができるからです。

もう一つ、文学教材で見ておきましょう。

「一つの花」という教材では、本文の中でもこの題名にある〈一つ〉ということばが繰り返し用いられています。やはり、〈一つ〉ということばがこの教材の中では重要な役割を果たしている点を見出す事は自然なことです。

注意したいのは、〈一つ〉ということばの意味が、物語の展開にしたがって変わってきていることです。

最初に繰り返し出てくる〈一つ〉は、〈お母さん〉と〈ゆみ子〉の口から出てきたことばです。お母さんが口にした物質的欠乏を意味する〈一つだけ〉という口ぐせのことばが〈ゆみ子〉の口ぐせにもなってしまうたのです。

ところが、ゆみ子の〈お父さん〉の「ゆみ。さあ、一つだけあげよう。一つだけのお花、大事にするんだよう——。」ということばで、〈一つ〉ということばに新たな意味が吹き込まれることとなります。

つまり、〈物質的な欠乏〉という意味から〈精神的な価値〉たった一つのかげがえのない美し

いもの、大切なもの」という意味に転換しているのです。  
「反復法」の表現では、反復されることばや事柄・内容の裏に潜んでいる意味やその意味の變化に注意して読んでいくことが大切になります。

【課題1】 「どうぶつの赤ちゃん」を読んで、「反復法」を手がかりに動物の赤ちゃんと人間の赤ちゃんとの違いについて考えていきましょう。

【課題2】 「一つの花」を読んで、「反復法」を手がかりに〈一つ〉ということばの意味について考えていきましょう。



(小学六年)

倒置法とは、文法上から見た場合、論理の順序を逆にする表現技法のことです。

この表現技法は二つの効果を生み出します。

まず、逆にすることで、前にもってこられた部分が強調されます。同時に、後にきた部分の最後が〈中止〉の形となるので、そこに余韻が生じて余情を感じさせるといふ効果を生み出すことが多くなります。

河井醉茗の詩「ゆずり葉」という教材があります。この詩の第二連目は、次のようになっていきます。

こんなに厚い葉

こんなに大きい葉でも

(ア)新しい葉が来ると(イ)無造作に落ちる

(ウ)新しい葉にいのちをゆずって――。

――線を附した部分の通常の慣用による順序は、(ア)・(ウ)・(イ)となるはずですが、(イ)と(ウ)がひっくり返っています。明らかに、「無造作に落ちる」という事態が強調されています。

前に述べられている「こんなに厚い葉」「こんなに大きい葉でも」ということばも、(イ)の部分の意味を強めています。これらのことばが、(イ)と(ウ)の倒置によって(イ)に接近し、結果的に(イ)の意味を強めることにも作用しているのです。

また、(ウ)の部分の最後は〈中止形〉であり、しかもへ―ダッシュで終わっていますから、〈…：リーダー〉よりもやや緊張を帯びた余韻を残す感じをもたらしていると見ることができます。

この最後の部分では、読み手はちよつと間を置いて、再び(イ)の部分「無造作に落ちる」を頭の中で繰り返すこととなりますから、二重に(イ)の部分強調されることになるのです。

この場合の倒置法は、明らかにこの詩の題名にもなっている「ゆずり葉」の〈ゆずる〉という極めて重要な行為を強調しているわけで、その意味からも是非とも取り上げていかなければならない部分です。



もう一つの事例を見ておきましょう。

教材「川とノリオ」(いぬいとみこ作)には、多くの倒置法が出てきます。

その多くは、次の二つの事例に見られるように、後ろに倒置された部分が前にすえられた部分の内容を補う形をとっています。結果的には、一つの文が長くなるのを防ぐ役割も果たしていると見ることができます。

①町外れに行く、いなかびたひと筋の流れだけけど、(ア)その川は(イ)すずしい音をたてて、さらさらと休まずに流れている。(ウ)日の光のチロチロゆれる川底に、茶わんのかげらなどしずめたまま。

②母ちゃんの生まれるもつと前、いや、じいちゃんの生まれるもつと前から、(ア)川は(イ)いつときの絶え間もなく、この音をひびかせてきたのだろう。(ウ)山の中で聞くせせらぎのような、なつかしい、むかしながらの川の声を――。

①と②の部分は、間にある一つの文を隔てて、この作品の冒頭の場面を構成しています。

①も②も共に、「音をたてて」「音をひびかせて」「休まず」に「いつときの絶え間もなく」流れている〈川〉の様子を強調しています。

そして、さらに①は、「いなかびたひと筋の流れ」と、「すずしい」「さらさらとした」音を強調し、②は、「母ちゃんの生まれるもつと前」「じいちゃんの生まれるもつと前」からということも強調しています。

このように、物語の冒頭の場面で、〈川〉の様子を詳しく叙述し、しかもその川が昔から変わらずに絶えることなく、すずしい音を響かせて流れてきたことが、倒置法によって表現されているという事実は極めて重い意味をもっています。

この作品では、〈川〉の果たしている役割・意味について考えながら読んでいくことを避けては通れないのです。

ですから、この問題を考えていくためにも、この冒頭の場面における倒置法を取り上げて行く必要があるということになります。

なお、この冒頭の場面を取り上げる順序は、作品全体を読み終わった後で、再びこの場面に立ち戻ってこの作品における〈川〉の役割や意味について考えさせていくという方法もあるでしょう。

なお、このような倒置法の技法が、この作品を叙事詩のような簡潔で歯切れの良い文体を作りますことにひと役かっている点にも注目しておく必要があるでしょう。

それは、叙述する順序を普通の形に改めて、両者を比較してみることで明らかになってくるはずです。

【課題】 「川とノリオ」を読んで、「倒置法」を手がかりにこの作品における〈川〉の役割や意味について考えていきましょう。

省略法とは、意識的にことばの無駄を省き、文章を簡潔にして含みや余韻を多くしようとする表現技法です。

省略法の中で省略されることばは、助詞・助動詞であったり、主語であったり、句であったり、述語であったり、様々です。

中には、全体を通して要点だけを取り出して記し、他は読み手の想像に任せるという場合もあります。

こうした省略の技法は、助詞・助動詞の品詞や、主語・述語などの文の成分のように、本来ならあるべきはずのことばが出現していないという場合には比較的分かりやすい。

ところが、全体を通して要点のみ記されていて、その他の余分なことばがそぎ落とされているという形での省略は、それと判断するのが分かりにくいものです。

たとえば、述語の省略などは、文末が〈体言止め〉の形をとることが多いので分かりやすいのです。

さらに、〈――〉や〈…〉などの区切り符号もしばしば省略部分に用いることがありますから、判断の手がかりとなります。

また、文末が〈いいさし〉の形となっていて、省略と判断することができる場合もあります。

省略法は最初に述べたように、文章を簡潔にして含みや余韻を持たせようとする表現技法ですから、文学教材に多く用いられています。

「大人になれなかった弟たちに…」（米倉斉加年作）という教材があります。

この教材では、題名からして、すでに「…」と省略法が用いられています。

(ア) でも、ときどき配給がありました。ミルクが一缶、それがヒロユキの大切な食べ物でした…。

(イ) 母は、よく言いました。ミルクはヒロユキの御飯だから、ヒロユキはそれしか食べられないのだから――。

(ウ) でも、僕はかくれて、ヒロユキの大切なミルクをぬすみ飲みしてしまいました。それも、何回も…。

(エ) 僕にはそれがどんなに悪いことか、よくわかっていたのです。でも、僕は飲んでしまったのです。僕は弟がかわいくてかわいくてしかたがなかったのですが、…それなのに飲んでしまいました。

これらの事例では、〈…〉や〈――〉の区切り符号を手段として省略法が用いられていることが分かります。なお、区切り符号の働きについては、改めて考えていくことにします。ここでは、省略法として見ていくことにします。

(ア)では、弟の「ヒロユキ」の食べ物であった「ミルク」の大切さが〈…〉で強められていると見ることができます。「大切な大切な」とことばを繰り返してもなお、現代の読者には理解してもらえないであろうといった語り手の気持ちが表示されていると見ることができません。

(イ)では、〈――〉によって、母の平素の口癖が強められ、重い響きをかもし出しています。

(ウ)では、それほどまでに大切なミルクをぬすみ飲みしてしまった「僕」の自分を責める気持ちが「何回も何回も」ということばの省略によって暗示されるとみることができそうです。

(エ)では、「それなのに飲んでしまいました」の前に「…」を置くことで、「僕」の自分を責める気持ちと同時に、その当時の食料の極端な欠乏という状況へのやりきれない気持ちも暗示されていると見ることができよう。

これらの事例で分かるように、省略法は、通常のことばでは表しがたいような複雑な心理を描き出すという効果も果たしているのです。

ことばによる表現を拒絶しているような極端な状況を表すのには、省略法は欠くことのできない表現技法とも言えます。

【課題】 「大人になれなかった弟たちに：：」を読んで、省略法を手がかりに登場人物の気持ちや場面の雰囲気を想像して話し合ってみましょう。

### 設疑法（誘いかけ法）

（小学五年・六年）

設疑法（誘いかけ法）とは、簡単には下せない結論をわざと疑問の形にして、その判断を読者にも行わせようとする表現技法です。

この場合、もちろん、書き手の中では、あらかじめ結論にたどり着くまでの考えの道筋ができています。したがって、読者はこの道筋をたどることで、あたかも自分の力でその結論に到達したような感じを抱くこととなります。

この表現技法は、読み手を無意識のうちに書き手の問題意識の方向に誘導して、書き手というしよにその問題について考えていくといった姿勢を作らせるのに効果的です。

読み手への呼びかけの働きも備えているのです。

設疑法は、説明的文章にしばしば用いられている表現技法であり、見過ごせない技法の一つです。

具体的な事例で見ていくことにしましょう。

「大陸は動く」という説明文教材です。

ここに、一まいの地図がある。大西洋を中心に、東側にアフリカ大陸とヨーロッパ、西側に南北アメリカ大陸がえがかれている。この地図をじっくりながめてみよう。(ア)何か気付くことはないだろうか。

ために、アフリカの西海岸と南アメリカの東海岸とを合わせてみよう。まるで絵。パズルのように、見事に重なり合ってしまうではないか。(イ)こんな不思議なことが、ぐう然に起こるものだろうか。

今から七十年あまり前、ドイツの気象学者アルフレッド・ウエゲナーは、この海岸線のなぞに気付き、強く興味をそられた。(ウ)なぜ、こんなことが起こったのだろうか。あるとき、ウエゲナーの頭に大たんな考えがひらめいた。(エ)大西洋の東と西の大陸は、もともとくっ付いていたのではないか。(オ)それが二つに分かれて移動し始め、今では何千キロメートルもはなれてしまったのではないか。

右の事例は、この説明文教材の冒頭の三段落です。

これだけの部分に五つもの設疑法が用いられているのはとても珍しいです。それだけこの文章で考察されている問題が普通の規模の問題ではないことを意味していると言えるでしょう。

ところで、右の文章の四行目から五行目に「まるでめ絵パズルのように、見事に重なり合っ  
てしまわないか。」とあります。この部分は、一見すると、設疑法に似ていますがそうでは  
ありません。読み手への呼びかけの気持ちは示されていますが、この場合の終助詞「か」は、〈問  
いかけ〉ではなく、〈詠嘆〉の気持ちを表しています。とは言っても、呼びかけの気持ちは示さ  
れていると言う点では、極めて設疑法に近いものであると考えてもよいでしょう。

(ア)・(イ)・(ウ)はいずれも設疑法とみることができます。

ただ、この中の(イ)は、〈疑問〉〈問いかけ〉の形にもなっていますが、「反語法」とも鳴つてい  
ます。この場合、終助詞「か」には、〈疑問〉〈問いかけ〉〈反語〉と三重の意味が込められてい  
ると見なすことができます。書き手自身の〈疑問〉〈反語〉と読み手への〈問いかけ〉です。

〈疑問〉や〈反語〉の意味を含んだ設疑法は、書き手と読み手とを混然一体とさせるので、そ  
の分、読み手をその問題に引き入れる効果が高まると言えます。

(エ)と(オ)も一応設疑法の形になっていますが、先の(ア)や(ウ)とはちよつと異なる趣を呈しています。

この部分は、直接には、ドイツの気象学者ウエゲナーの考え・疑問の引用なのです。しかも、  
このウエゲナーの考え・疑問をそのまま設疑法として用いているということになります。

しかも、この部分は明らかに、この教材「大陸は動く」の結論に当たる内容ともなっているの  
です。

つまり、これらの三つの段落の部分は、(ア)・(イ)・(ウ)で問題の所在(＝疑問)が〈問いかけ〉の  
形で示され、(エ)・(オ)でその〈解答〉が同じく〈問いかけ〉の形で示されているのです。

この部分は、いわば、読み手に対して、あらかじめ説明しようとすることの骨格をとらえさせ  
ておき、同時に、この問題に関する興味・関心を抱かせようとしているのです。

設疑法が極めて重要な役割を果たしている事例と言えます。

なお、この教材では、右の三段落に出てくるものとは別に、次のような設疑法が用いられてい  
ます。

○カタツムリが、大西洋を泳いでわたることなどできるだろうか。

○重く大きな大陸を、何千キロメートルも航海させたのは、いったい何の力なのか。

○大陸を動かす原動力は、何だったのだろうか。

こうした設疑法をとどこどこに配して、読み手の興味・関心を絶えず引きつけておくように  
記述しているのです。

このような設疑法に着目していく際に見落とせないことは、それが、文章全体の〈論理の展開〉  
と密接にかかわっているということです。

つまり、設疑法を中心として、〈設問―解答〉、〈問題提起―解説〉、〈結論―実証・論証〉とい  
った論理の展開が浮き彫りになってくるのです。

説明的文章教材における〈論理の展開〉をとらえさせていく時の重要な手がかりとして注意し  
て取り扱っていききたい表現技法です。

### 【課題】

「大陸は動く」を読んで、「設疑法(誘いかけ法)」を手がかりにしてこの文章の〈論  
理の展開〉を図式化してまとめてみましょう。